

石川啄木の借金の論理

近 藤 典 彦

I 「小児の心」

次に記すのは一九〇二年（明治35）一月初めの啄木である。啄木はこのとき盛岡中学校を中退して上京したばかりであった。

白亜城（すなわち盛岡中学校―引用者）を脱出した啄木は、匆忙として行季を纏め、電光石火の如く、東京は小石川小日向台町の私の下宿に落下した。まさかと思ふて居た私の驚愕は人々の想像に任せる。……

その頃の啄木は、非常に遠慮深い方で、丁度直ぐ近所に明間の有つたを幸ひ、程なく其所へ移つて行つた。⁽¹⁾（傍点―引用者）細越夏村のこの証言は注目に値する。第一次上京のときの啄木は「非常に遠慮深」かったのである。そしていかにもうぶであった。だから三カ月もたたぬ頃にはこうなっているのである。

小石川の先の下宿を着のみの盛で逐出された私は、東京へ出て三月とも経たぬ頃ではあり、年端も行かぬ身空で経験も無ければ知慧もなし、行処に塞つて了つて、二三日市中を彷徨き巡

つた揚句に、真壁六郎といふ同年輩の少年と共に、その人（佐山某といふ人―引用者）の室に二十日許りも置いて貰つた事がある。⁽²⁾

明治三十年代の東京の冬、着のみのままで路頭に迷うぽつと出の少年。彼はある日などこの寒い部屋から眺める外の大雪に故郷の父母を思いとめどもなく泣くのである。そして心身ともに病んで、しかし捲土重来を期しつつ、帰郷。一九〇三年（明治36）二月末のことであつた。

ところが、それから一年八カ月後に敢行した第二次上京時（一九〇四年一〇月末―翌年五月）はまったく様相がちがう。たとえば啄木の盛岡高等小学校以来の親友はこう言う。

あとで聞いた話だが……啄木は例の五ツ紋の羽織に、仙台平の袴……をはいて、その頃最高級の煙草「敷島」をふかして抱え車で乗り回していたそうだ。……

そして車代が十五円たまつて、車屋のおやじと娘が困つて、さいそくしても払わなかつたそうだ。……

彼は本郷弥生町の大盛館にしばしば上野さん（洋画家―引用者）を訪ねて、西洋美術を論じたり盛んに節子さんののろけを聞かせたり、それから当時の文壇の知名人だれだれに会ったとか、尾崎行雄と近く会食するとか、例の「あこがれ」の出版が遅れたところで、口癖のように「あこがれ」さえできれば何百円入るとか、一時に収入のあるような触れこみで、結局は、たびたび無心をされたそう⁽³⁾だ。

これは伊東圭一郎の聞き書きだから厳密な意味で事実かどうかは別として、当時の啄木の雰囲気伝えており、すぐあとで見る収支の帳尻とも符合する。次に掲げる手紙は例の花婿のいない結婚式という事件の渦中にまぎこまれた友人中館松生が、その渦中で書いたものであって、誤解はともかく記憶が正しいということはほとんど考えられず、したがって当時の啄木の言動の一端があざやかに浮かび上がる。

佐藤君、君は石川よりきいた岩崎（岩崎財閥のこと）へいって三万円借ようとした時の話を記憶してるだろう。その時何んというた。自分は、初めて詩人たることを自覚した。詩人は富豪の助けを受けることは非常にいさぎよしとせざる所と自覚したというたじゃないか。……

然るに彼れの行為のすべてはいさぎよしとせざる事ばかりじゃないか。それも吾等を欺く手段であったのだ、工藤三郎君にこういうたそう⁽³⁾だ、尾崎（行雄、元東京市長）から三百円の借用証を書いて貰って三井（三井財閥のこと）へ行ったらハネつけられた⁽³⁾。

まことに端倪すべからざる啄木がここにいる。

次に在京中の六カ月と二〇日間に啄木が費した金銭を現在確認できるところで挙げると以下のとおりである。

入京した時持参 約 三円

山本千三郎より為替 六〇円

金田一京助より借金 一五円

佐土原町の下宿 二五円

大和館―下宿 七〇円

田沼甚八郎より借金 五円

波岡輝茂より借金 一円

合計約一七九円也⁽⁴⁾

当時学生の下宿代は贈付で十二円か十三円といったところ（本郷の赤心館や蓋平館）。もっと安いところもあっただろう。当時の巡查の初任給（基本給）は二円（一九〇六年）⁽⁵⁾、小学校教員の初任給は一〇円―一三元（一九〇〇年）⁽⁶⁾だといふから一五円あれば一カ月を十分に暮らせよう。六カ月と二〇日間で計一〇〇円で暮らせる計算である。しかるにかなり少なく見積って七九円もの超過経費である（ちなみに啄木の父が宝徳寺住職を罷免される原因となった宗費滞納額は一一三元であった）。伊東らの証言はうらづけられるわけである。きわめつけは土井晩翠夫人をあざむいた一〇円の借金と花婿のいない結婚式であった。中館の手紙に見られるようにごうごうたる非難が啄木にあびせられるようになる。罪は四カ条。一、見さかいのない、偽りの理由による（と見えた）多額の借金。二、借金・下宿代等のふみたおし。三、非常識な浪費。四、借金やパトロン捜しにまづつる嘘やホラ（と見えた）話。

第一回目の、敗残の帰京後の啄木はユニオン会の親友らをはじめ、

大切な友人たちをほとんど失っていない。重要な友情関係はほぼ継続し、また友人たちは励ましてくれもした。しかし今回の啄木に対しては厳しかった。ごうごうたる非難の上に、絶交状がつぎつぎにたたきつけられていった。(そして「金にだらしない男」「生活落伍者」「借金魔」等々の汚名が後世に残ることになる。) 啄木にとっておそらく最大のショックだったのはユニオン会の親友たちからの絶交だったと思われる。そのうちの一人小沢恒一は絶交状をたたきつけておきながら一九〇六年(明治39)正月、啄木に年賀状を出した。啄木はそれに対し実に厳しい返書をしたためた。そこには懐旧の情とか友情の復活を懇願する卑屈さとか、あるいは自己の行為を悪とする観念とか悔い改める気配とか、それらに類するものは微塵もない。断固たる態度で一貫している。文体は冷静で理知的である。啄木は自分のやったことにどうやら堂々たる信念をもっているようである。事実啄木は借金とそのふみたおしについて次のように考えていたのである。一九〇五年(明治38)一月一日付波岡茂輝宛書簡。

大兄よりも借りたるもの未だにお返し仕らぬ事、記憶いたし居候が、これらは出来た時に差上げむとの考へに候へば、失礼乍ら、お申訳はなく候へど、自分の心では疚しき事なしと思ひ候、……

波岡は啄木よりはば八つ年上で当時早稲田大学の講師嘱託になっただけ。啄木は心おきなく思いを述べている。その一節に借金のくだりがあるわけである。このあと、人々のあらゆる誤解などどうでもよい、自分は今誰も知らぬ信念の下に人知れぬ闘いを続行中である、自分は結局その闘いに勝つであろう、といった内容がつづく。

どうやら啄木には借金と借金を返さない(一時的にふみたおす)ことを正当化する論理があるようである。

評論「古酒新酒」を見てみよう。これは一九〇六年(明治39)元旦の岩手日報に特集されたもので天才主義に基づいて時代を論じ、自己を論じたもの。とくに顕著なのは前年の『あこがれ』上梓前後の自己のふるまいへのごうごうたる非難に対する反撃の意図である。この意図の確かさは啄木自身が小笠原謙吉宛書簡(一九〇六年一月一八日付)にこう書いていることで裏づけを得られる。「兄よ、小生が昨年中に受けたる種々の迫害が、年末に至りて切実なる追懐の情に訴へられ、その不平の余憤が、はからずも『古酒新酒』中に幾分を発せられたるもの、又余儀なきに非ずや。」では「古酒新酒」には何と書いてあるか。一四の節からなる本文中の九番目の節は「過を知らば改めよといふ語あり。然も世には失敗の起る所を知り乍ら、猶そを改むるの要なき事もあるぞかし」で始まる。そしてこの節の結びはこうである。

我は過去数月間の長き強き失敗を悔ゆる能はず。何となれば、これたゞ我が心余りに小児の如くなりければ也。余りに赤裸々にして物を顧みざりければ也。我如何にして斯くの如き失敗を再びせざるをうべきかを知らざるに非ず、そは世の多くの人と共に猫の眼と声と猿の智と狒々の慾を学べば足れば也。然らば何故に失敗の因を改めざるか。答へて曰く、小児の心乎、小児の心乎、噫これ我が常に望む所なれば也。

「過去数月間の長き強き失敗」の主たるものは当然さきほどの「四カ条の罪」である。となるとおどろくべき論理となる。「四カ条の罪」はただ「小児の心」によって行動した結果に過ぎぬ。あ

な借金やそのふみたおしや浪費といったあやまちには、すまいと思えばしなくて済む道くらい自分は知っている。しかし自分はそんないやらしい道を歩むつもりはない。これまでどおり、自分の赤裸々の心に従って生きてゆくばかりである、ということなのだ。

彼の「四つの罪」を正当化してしまふ「小児の心」とはいかなるものなのか。それはいつ、どのようにして啄木の中に形成されたのか。これらを次に考察しよう。

「小児の心」という言葉がはじめて姿を現わすのは一九〇四年（明治37）七月二三日のことである。この年の一月一日石川啄木と堀合節子の婚姻について両家の合意ができ、啄木の人生は新しい局面に入った。このあと七月二三日までの啄木の心の軌跡を瞥見すると以下のようなものである。婚姻が現実化したことは、詩人として舞い上がったばかりの啄木に突如、夫婦二人の独立の生活、という重苦しい課題をつきつけた。この課題はあたりまえの生活人からすればあたりまえの課題である。しかし夢想しているのは「詩人」になることである。この夢とかの新事態との間にはあまりに深い淵がある。もちろん父母には何の財産もない。裸一貫が出発点である。彼はこの淵を見つめるかわりに、目を「洋濤万里の彼方」に向ける。つまり渡米志向が狂ったように燃え上がる。きっかけは、まるで第二のバイロン卿のように喧伝されるヨネ・ノグチの出世作、*From the Eastern Sea* を読んだことにある。本稿で考察する時期における啄木の結婚前後の生活構想は、上京（詩集刊行・金策）、夫婦で渡米、（あととはきつとうまくゆく、ヨネ・ノグチのように）であった。

いかにしてそれを果たすか。まず上京からはじめねばならぬが何

しろ金がいるのである。金はないのである。書簡と日記によつてそのまがきようを眺めてみよう。一九〇四年（明治37）一月一日、姉崎朝風に職さがしの必要もあつて上京したいと書く。翌日婚約成立。二一日ヨネ・ノグチに書く。渡米の熱望は「自国に於ての学資さへない、いはゆるベニールス・ボーイの私に取つて、あまりに突飛な、分外、又遂行し難い希望でありませう。突飛か、分外か、それ、己が関する所でへない。あゝただこの一事が、私の生涯の進路をひらく唯一の鍵ではないか。さらばその鍵を握り、なつかしい大兄の高風に接すべく、如何にして己が渡航の機会——否費用を見附けたらよいであらうか。ああ大兄よ、少なくとも之れは、私の未だ嘗て遭遇した事のない大問題であるのです。如何にして？ 如何にして？ 私は未だ知りませぬ。たゞ私は心に期してそのたのしき日の必ずあるであらう事を信じて居ります。」

あわれなほどに意図は見え透っている。境遇に屈して地道な生計の道をまず第一に考えるのではない以上、こうして無心するか、パトロンを求めるかせざるをえないのである。ノグチはもちろんその手にのらぬ。二二日の日記。「あゝ人生か、人生か。その烈しき悲憤の戦ひに乗り出づく、我らの希望のいかに心細きよ」婚姻の欲喜からわずかに一〇日も経たぬうちに、結婚生活の不安におののいてゐる。二七日、姉崎宛ての書簡で「出京費」を暗に無心しかつ就職の世話を哀願する。姉崎は黙殺。二月三日結納。二月、三月、上京しようとおせる。四月一二日姉崎宛て。またしても渡米費用を無心。姉崎黙殺。この頃しきりに友人たちに秋までには処女詩集の原稿をたくわえて上京したいと言う。六月八日前田林外宛書簡で「何なりとも自活のたづきとなる程の事有之候はゞ、何卒御世話被下度候」

と懇願する。六月二〇日、詩「壁の影」を制作し、この前後より心身の不調が続き七月二〇日までの間は詩の制作も日記の記入もなく、わずかに二通の書簡があるのみ。前年二月末の敗残の帰郷以後啄木は何度か病におかされているが、いつも精神的なものに連動しているかに見受けられる。事態が好転しはじめると同復し、暗転してゆくと思われ。このたびの病もそのサイクルの一環（それも最後の）であろうかと思われる。この間何をしてくらしたのかわからぬが、詩の方は「無興も無興、殆んど生きて居るのが苦痛な程の無興に筆投げしまゝ」であった（七月二二日前田林外宛て）。このような落込みの最大の原因は、最大の悩みすなわち結婚後の生活をいかに営むかが具体的にまったく定められないことと深くかかわっているとされる。「出京費」すら出処がないのだ。このように落ちこんでいた啄木を盛岡の友人たちが七月一〇日頃から続々と訪ねて来た。氣力がそうして上向きになってきたところへ節子からの便りが届く。啄木は一週間返事を書けなかったようだ。自分に全幅の信頼をおく婚約者からの手紙であつてみれば啄木はいやでも最大の難題を深く思ひかえさずにはいられなかったであろう。手紙を受けとつて七日目の朝すなわち七月二一日朝、啄木は四月八日以来中断していた日記を再開する。それも愛人節子への書簡という形式をとつて。二一日、二二日分の内容についての分析は他日にゆずるが、その日の出来事にかかわつて思ひつくまを書きつらねている。ところが、二三日「小児の心」をめぐる文章があらわれて、以後二八日の中絶までワグネルの「タンホイゼ」論一本にテーマがしぼられる。（友人二人とかるた遊びに行つてその）

かへりには夜の道の静けき小草の夢を踏みて、暗澹たる空に小

さき星のたゞ一つかゝれる、私初めて、甦りたる様の心地いたし候。蛭々たる東西の山趣。天地は深き黙思の眠りに静みて、路に臨む楊柳の影黒く、草舎遠近に散点する所―あゝかゝる時に、たよる者を恵まぬ事なき「自然」てふ全能の女神は、其いと高き所の靈精の座を下りて来て、慕へる者の胸ふかく、温かき慰安のくちづけをば賜ふなる。かくて、我は思ひぬ。あゝ、それ小児の心乎、小児の心乎。!!! 禍ひは罪なき小児の心を襲ひえざるなり。清き泉のほとりに咲ける薔の花のたとへ流れて濁江の岸に泥の香さぐるとも、潔淨清白の色は何時の世かそのけだかき趣を失はん。飾ることなき小児の心はやがてその不断の清白に非ずや。若し今の世の粉黛を事とする交際の道を更めてさらに吾人の救済を求めんと欲せば一に此小児の心を以て人と交るの法あるのみ。（傍点―引用者）

二日前の記述に先に見た一月二二日のそれと共通する次のような一文がある。「閑座夜深うして悲愁しきりに襲ひ至るの時。さすがにせきあへざりし涙の、思の胸より迸しる宵もなかりしに非ず。」これは、家族・友人・知己を前に快活にふるまっている啄木の意識の深層にここ半年間常にかの苦悩がわだかまっていたことを示す。かるた遊びにうち興じての帰り、友人と夜道を歩きながら啄木の意識のその暗部がひそかにうずいている。そして「暗澹たる空に小さき星のたゞ一つかゝれる」を見て、啄木は「初めて甦りたる様の心地（傍点―引用者）」がする。悩みを脱却する啓示を受けたような気がしたというのである。それはまず「たよる者を恵まぬ事なき『自然』てふ全能の女神」の存在を感じたことをきっかけとしている。「たよる者」とは誰よりもまず啄木自身であらう――内に

暗い悩みをかかえた」。こうした自分に「恵み」と「慰安」を与えてくれる大いなる存在を感じたとき、その存在の前にいる自分の中に突然「小児の心」を見出すのである。「あゝそれ小児の心乎、小児の心乎。!!!」が発見の感動の大きさを示している。「小児の心」とは高山樗牛の「無題録」中の次のくだりを受けたものであろう。

嗚乎小児の心乎、小児の心乎。玲瓏玉の如く、透徹水の如く、名聞を求めず、利養を願はず、形式、方便、習慣に充ち満てる一切現世の桎梏を離れ、あらゆる人為の道德、学智の繫縛に累はされず、たゞ／＼本然の至性を披いて、天真の流露に任かすもの、あゝ独り夫れ小児の心乎。(傍点―引用者)

時の啄木は「名聞を求め」「利養を願」っているのだから、撰取の力点はたとえ私が傍点を打ったところであろう。が、ともあれ啄木は自らの中に今「本然の至性」すなわち天から与えられた自然のままのいたって純良な心、を見出しているのである。そしてこの心を「天真の流露に任かす」なら当然「あらゆる人為の道德」等に「累はされ」たりしないはずなのである。日記文中の「清き泉のほとり咲ける蘋の花」とは啄木の啄木以前の雅号が白蘋であったことを思えば何をさすかは言わずと知れる。その花は「潔淨清白の色」「不斷の清白」をもち、「濁江の岸に泥の香さぐるとも」けがされることであってはならぬものである。すなわち「今の世の粉黛を事とする交際の道」を改めて「吾人の」(つまり自分の)「救済を求めんと欲せば」に此小児の心を以て人と交る」道あるのみ。このように言うわけである。これは啄木にとって一つの開悟であった。「初めて甦りたる様の心地」とはまさに半年間の憂悶からようやく解き放たれたことを示しているよう。

なにゆえに、またいかにしてこれは開悟でありうるのか。啄木の論理はさらに分析されねばならない。啄木は結婚が現実には日程にのぼったときひどくうろたえたのであった。自分一身が妻と二人分の生計を担わねばならぬ現実と直面して「詩人」になることしか考えられず、渡米を夢想することで現実を推しひらくことを回避しつつ、卑屈な無心や気のり不十分の就職依頼をくりかえしていたにすぎないのだった。そして六月下旬からの心身の不調は現実社会の強大な威力の前に手も足も出ぬ卑小な自分をいやというほど思い知らされていたことを伺わせる。このように現実の社会にたじろぎおいつめられたと感じた啄木が、自然の前に立つ幼な子のような自分というイメージをテコにして、社会との関係を大逆転させるのである。自分が社会人として無力であることはこの半年間あきらかに負の要因であった。しかしそうした自分こそ「小児の心」の持主なのだ。であるなら、自分こそ高く清らかなのであり、自分の前に立ちほはだかる世の中こそ低く、けがれた存在なのである。「清き泉のほとりに咲ける」白蘋よ、世間という「濁江」の「泥の香」にも己の「潔淨清白の色」を決して汚されるな、論理はこのようになってしまふ。この論理は「榮華の巷低く見て」自らを高しとする当時の一高生や「汚れの現世遠く去りて、黄金の波にいざ漕がん」と歌った三高生の心情に酷似しているかに見える。また一九〇三年一月制作の詩「啄木鳥」にも共通しているかに見える。しかしきわめて大きなちがひがある。一高生も三高生も結局その世間に入って同化して行くことは前提となっており、(旧制)高校生という特殊なつかの間の身分を謳歌しているにすぎない。「啄木鳥」は霊の住家に汚れが入りこまぬよう監視するという、観念的な詩人観の形象である。「小

「児の心」の論理はちがう。世の中と対立するかぎりの全自分は（心も、欲求も、行動も）すべて絶対的に肯定されるのである。そしてその自分に対立するかぎりの世の中は悪として否定してしまうのである。しかもそれは一時的なのではない。彼のそのときのつもりとしては自分がこの世にあるかぎりはそのように自己を持ち、かつ世に對するといふのである。

はたして三年後、北海道函館で執筆したと見られるエッセイ「一握の砂」に、先の七月二三日の日記および「古酒新酒」の引用箇所と同じ論理がもっともくわしく展開される。要約しておこう。

人は誰も生まれたときは「神の如く無邪気なる小児」である。しかし、「人を多く見、人の言語を多く知るに従つて」不安・羞恥・秘密・猜疑を知るようになる。さらに次々と天真さを失つていつて、「はては人の思惑にのみ心を牽かれて、心ならざる事を言ひ、又は行ふに至り、茲に一切の悪徳」が生まれる。そして「遂には路傍溝中の汚水をも争ふて飲まむとするに至る。この汚水は即ち虚栄也、黄金也、偽善也、迷信也」。こうして小児の心が全く死んだとき人はこれを成人という。「小児は成人の父なり」と「湖畔の詩人」ワーズワスはいつたが人はその小児を殺して成人をつくっているのだ。人は随所に自己の父母である「自然を殺戮し了らむとして、先づ」小児という自然を殺し尽すのだ。ところで我々は常に「我等をして自然ならしめよ」と願っている。小児こそ成人の父であるのに、「我等は何故に赤裸々」で「公明」で「天真」であることができないのか。なぜ大きな声でものを言い、行きたい所へ行き、したいことをし、心のままに笑ったり泣いたりできないのか。できない理などないではないか。まさに小児の如くふるまうべきなのだ。

「自然の為に、最も憎むべき反逆を企てつつある人類に向つて、我等の『正しき反逆』は最も勇敢に戦はれ」ねばならぬ。「世に最も貴きもの三あり。一に曰く、小児の心。二に曰く、小児の心。三に曰く、小児の心。ああ、生れたる儘にて死ぬる人こそ、この世にて一番エラキ人なるべきなれ。」（『全集』④——二二二——二二四）

以上の論のエッセンスはすべて七月二三日の日記の短文の中にある。当時の啄木はすでにワーズワスのことばも知っていたのであるから「一握の砂」の論理は事実上七月二三日にでき上っていた、と見てよいのである。だから開悟とわたくしが言うのは誇張ではない。そして七月三十一日付小沢恒一宛書簡の次のくだりが、啄木の屈折する心理の種々相と七月二三日という到達点を示している。

「絶へず惑ひ、絶へず驕り、また絶へず悲しみ、さて詩もえたり、人の世の事、悟れりと思ふふし／＼もありき」以後「小児の心」は啄木の生活の一原理である。（七月二三日以降の啄木に上京後の仕事を探した気配は見出せない。九月一日前田林外に宛てて「目下旅費金策中、上京後は何とも成るべく候」と書く。前回あれほどみじめな敗北をなめた啄木がこう書く以上、仕事以外の別の「秘策」が胸にあるということではなければならない。）

Ⅱ 天才主義

「小児の心」は世間という他者に対して自己の立場を絶対化する論理なのであるから、利己主義と紙一重の論理である。いや利己主義そのものであるともいえる。ところで啄木は一九〇三年（明治三六）九月一七日付野村長一宛書簡ですでにこう言っている。「最も

自己の本性に忠実なる人は、やがて最も他の人に忠実なる人ではないか。利己主義と個人主義（我が所謂）とは雲泥の差である。真に自己を愛するものは、又他の者をも一汎に愛すべき者である。」啄木の論理の中にあつては、「小児の心」は個人主義でありえても利己主義ではない。利己主義であつてはならないのである。いったいこのように考える時の啄木の論理はいかなるものであるのか。これを解くには、「小児の心」は啄木の文学的生涯全一〇年間の八割の時期（一九〇二—一九〇九）を規定していた浪漫主義の中に、とくにその特徴的表現としての天才主義の中に位置づけられねばならない。紙幅の都合で啄木の天才主義の形成過程の考察は措き、その内容をここに要約しておこう。天才主義（もしくは天才崇拜）の内容を簡潔に示すものとしては高山樗牛の弟斎藤野の人の次の一文が好適であらう。

天才崇拜とは何ぞや、これ天才の独創せる世界の価値に對して讚美と崇敬を捧ぐるの謂也、……若し彼の世界の価値にして無限ならば、世に如何なる犠牲と崇拜をも辞すべからざる也。⁽¹¹⁾

啄木の天才主義はこれに加えて以下のようなユニークな特徴を持つ。

それは第一に天才意識という独特の内核を持っている。つまり自らが天才であるという自負を啄木自身が持っているのである。したがって天才である自分自身（少くとも未来の自分自身）も崇拜の対象なのである。そしてその天才実現のためには「如何なる犠牲……をも辞すべからざる也」なのである。つまり啄木の天才主義は彼自身の内なる天才意識によってひたされ染め上げられているのである。

そして第二に彼の天才主義は華麗な装いをもっている。自分の天

才主義は利己主義とは決定的に違つと自他に言いよかせる理論すなわち一元二面観哲学である。簡単にいえば、宇宙の根本は絶対意志（つまり一元）である。そしてこの意志は自己拡張の意志と自他融合の意志（二つを別言すれば、意志と愛）という二面から成り立っている、というのである。したがって啄木の主観にあつては猛烈な自己拡張は常にそれにふさわしい愛と一体となっているのである。つまり「利己主義と個人主義……とは雲泥の差」なのである。この哲学は姉崎嘲風の「再び樗牛に与ふる書」等を基盤として構築されていたのであるが、その過程できわめて重要な役割を果たしたのは後述するように C. A. Lidsey の Wagner などであつた。こうして構築された一元二面観哲学が天才主義のからだを装っているわけである。つづめていえば啄木の天才主義は天才意識・天才主義・一元二面観哲学という三層のモメントから成っている。以上のような特徴をもつ天才主義をわたくしは啄木天才主義と呼ぶ。⁽¹²⁾

ところで、啄木天才主義がほぼ完成したのは一九〇四年（明治37）一月の下旬である。そしておもしろいことに、ちょうどその直後すなわち一月一四日の婚約の頃から観念の中で生活の現実的課題と向き合い、圧迫されて彼は人知れず煩悶を重ねたのであつた。その果てに見出したのが「小児の心」の論理なのであつた。つまり、天才主義自体が天才出現のために凡人に犠牲を要求するという論理をもっているにもかかわらず、啄木はこれを借金や浪費の論理へと飛躍させることなど思つてもみなかった、ということをや右の事実を示しているわけである。

さらに「小児の心」についても一考を要する。「小児の心」はたしかに樗牛のことばをうけたものであつた。抽象的なレベルでは啄

木は樗牛と同じ意味でこのことばを使っている。だが、啄木の「小児の心」は樗牛には思いもよらぬまったく独自の意味と機能を取り入れている。この「小児の心」は借金や浪費等「四つの罪」正当化の根拠となっているのである。

こうして、啄木の論理は次のように進展したはずなのである。まず高山樗牛「無題録」を媒介にして啄木天才主義は「小児の心」という補完物を取りこんだ、次にもう一つの著述を媒介にして「小児の心」は借金や浪費等を正当化する根拠という機能を包摂した、という順序で。もちろんこの二つの過程は同時的、瞬間的に進行したということも考えられる。その可能性は大きいとわたくしは考える。進行が同時的、瞬間的であっても論理的過程は右の如くでなければならぬであろう。

さて、第一の過程についてはすでに見てある。第二の過程について以下に見よう。

III Wagner by C. A. Lidgley

第二の過程を推しすすめた著述は C. A. Lidgley の Wagner である。その根拠をも示しつつ以下に第二の過程の考察を行なう。

まずこの著述と啄木天才主義との関係を確認しておきたい。啄木天才主義の理論的表現たる一元二面観哲学形成においてリッジの Wagner が占めていた位置について啄木自身が次のように述べている。(敗残の帰郷後の激しい煩悶の中で)

バイブルを読み、法華経を読み、猶且つ真に動く能はざりし小生は、この(デカルトの)引用者『我的存在』の「意識に触るゝに当つて、俄然として醒めたるが如く候ひき。生存の意義

と価値とはかくして朧る氣に我が暗黒なる胸中に一道の光明を投げ、幼きより我がいのちなりし自負の一念は、又かくして別箇の意味に於て我が枯槁の生活に復活したり。この時に當りて、リヒャード・ワグネルの偉大なる思想こそ、小生の此の意識をして益々明瞭ならしむる唯一の力に候ひしか。ワグネルの楽劇の根底たる意志拡張の愛の猛烈なる世界観は、根本より小生の性質と相吻合するを得るの理由あり。彼は同じくシヨウベンハウエルより出で乍ら、トルストイと共に意志消滅の誤謬に陥らず、又ニイチエと共に意志拡張のみの極端に走らざりき。

この相反したる二思想の間に、微妙なる一大発見は彼の天才によつて見出されたり、乃ち、意志拡張の愛の健闘的勇氣によつてのみ到達せらるべき神人握手の妙境也。かくて彼が作中のヒーローは皆此の理想の戦士也。彼等にはたゞ愛と戦あるのみ、固より生死省みるの暇なき也。而して彼自身の一生は又実にかくの如き勇敢なる戦士の好模範なりき。ワグネルの我に与へたる教訓の偉大なる事、それ幾何なりとするぞ。(一九〇六年一月一八日小笠原謙吉宛)

帰郷後の煩悶の底にあつて自分はデカルトの「我考ふ、故に我在り」という言葉に触発され、しだいに「わがいのちなりし自負の一念」を復活させることができたが、この過程を推し進める際の自分にエネルギーを注入してくれたのは、ただ「ワグネルの偉大なる思想」だけだったという。それほど決定的な力となった「ワグネルの偉大なる思想」をくみとるための源泉はほとんどリッジの Wagner 一冊であった。したがってこの英書こそ「唯一の力」のもとに「候ひしか」ということになる。

そしてこの「ワグネルの偉大なる思想」つまり「ワグネルの楽劇の根底たる意志、擴張の愛の猛烈なる世界観は、根本より小生の性質と相吻合」したという。つまり「ワグネルの偉大なる思想」は、すなわちその楽劇の中に展開されている思想は、自分の性質と、ひいては一元二面観哲学と根本において合致する、という。

最後に決定的に重要な二つのセンテンスがある。「而して彼自身の一生は又実にかくの如き勇敢なる戦士の好模範なりき」と。つまり（リッジーの *Wagner* に描かれた）ワグネルの一生こそそのまま、生きた一元二面観哲学だった、というのである。だから次の一文がつづく。「ワグネルの我に与へたる教訓の偉大なる事、それ幾何なりとするぞ。」

啄木の中にあつて *Wagner* の占める位置の大きさはかくの如きものなのである。このことは一九〇三年（明治36）にかぎらない。この書簡や同じ三月二〇日に書かれた「洪民日記」等によると一九〇六年においてすらワグネルの位置は十分に大きい。まして「小児の心」を発見した一九〇四年七月二三日にあつては *Wagner* の占める位置は前年同様に大きいと見てまちがいない。

かくてリッジーの *Wagner* は啄木の一元二面観哲学形成にあつて、まず第一にこの哲学のひな型を与えたのであり、さらに、この哲学を具現した人生の生なましい手本を与えたのであつた。

では、樗牛の「小児の心」が啄木流「小児の心」に転化するに際してこの英書はいかなる働きをなしたのであるうか。これについて

は二つの回路を考えるべきであるとわたしは思う。
「一つ目は小児のような childlike 魂の持主、ワグネルという回路。実はリッジーという人の描くワグネル像は美化されすぎてい

る。逆に言えばワグネルの欠点を曲筆を弄していたるところで弁護している。その弁護の論理こそがこれから見ようとする回路である。

ルートヴィヒ二世以前にすでに立派なバドロンたちに恵まれたワグネルだったが、あいかわらず彼は金に困りつづけた、という文脈をうけて以下の叙述がなされると承知されたい。

たとえば一八六〇年一、二月のバリ公演では、

Financially, the result was a loss of some 10,000 francs.

(p. 46)

財政的には結果はざっと一万フランの損失だった。

三月のブリュッセルでの二度の演奏会はいっそうひどい金銭上の災厄におわつた resulted in further pecuniary disaster (p. 46) とリッジーは言う。だがこの頃ワグネルにはカレルギス夫人からの援助などかなりの収入があつたはずなのにリッジーはそれにはふれないで別の収入に触れながら次のように書く。ワグネルはショット社から「指輪」の版權として受けとつた報酬の大部分を生計の手段を購入するのに使つてしまった。「いっそうひどい金銭上の災厄」の原因はそれだ、とリッジーは言う。収入が少なかつたから生活費に困つたのか、十分の収入があつたが浪費が大きすぎて「災厄」になつたのか。リッジーは意識的にぼかした上でこのときのワグネルの心事を気の毒だという。生活のために芸術を売ることが余儀なくされたのだから、と。そして興味深い一文が続く。

His real nature was so simple that it was easily misunderstood. (p. 46~47)

彼の本当の性質は非常に純真だったのでそれは容易に誤解された。(英文のイタリックと邦文の傍点は引用者。以下同じ。)

リッジはワグネルの純真さをこう説明する。ワグネルにあって芸術とは高貴なもの美しいものすべてのエッセンスであり、神聖に、けがれなく保たれるべきものである。彼の全目的はその最高の理想を満足させる作品を生み出すことなのである。この良心的な生き方の中にワグネルの敵たちは「どうもんな虚榮 overweening vanity」しか見ないのだ、と(四七頁)。どうもんな虚榮とは浪費を指しているのだがリッジは、浪費などはワグネルがその崇高な目的を達成していく上でなくてはならぬものであったのだと言いたいらしい。

The old monetary troubles began to press on him again.

(p. 51)

旧い金銭上のトラブルが、ふたたび彼の心に重くのしかかりはじめた。

旧い負債が、ふたたび問題になったというのだ。リッジはここでも問題をいったんばかす。ワグネルの初期作品の作曲料が不当に安かった。ドレスデンの劇場経営者は「タンホイザー」、「オランダ人」の作曲に対する報酬を、それらはかつてワグネルが官廷歌劇場指揮者の義務として作ったものだからというので、支払わなかった。だから?! old monetary troubles が復活したという。が、ともかくこのトラブルに悩まされたワグネルは……

He was now reduced to giving concerts to eke out a subsistence. (p. 52)

彼は今や暮しをかううじてやって行くために余儀なくコンサー

トを行うことになった。

そしてウィーン、プラハ、ペテルブルグ、モスクワ、ペスト、カールスルーエ、レーヴェンベルク、プレスラウで演奏会を行なった。結果は

A certain amount of money was made by these tours, but his affairs nevertheless went from bad to worse. (p. 52)

ある程度の額の金がこのツアーでできた。しかし、にもかかわらず彼の事情は悪いからよりわるいになった。

どうしてワグネルはこういうも金が入ったあとに but が来て、bad (悪) から worse (よりわるい) になるのだろうか。

His enemies attributed this to the "sybaritic existence" he led; luxury worthy of Oriental potentates was ascribed to him. (p. 52)

彼の敵たちはこれを彼がおくっていた「遊蕩児的生活」に帰した。東洋的君主風の贅沢が彼に特有のものと思なされた。

どうしていつも bad が worse になるのか、読み手はだれでもここではつきりと分かる。贅沢なのだ。それもふつうの贅沢ではない。「東洋的君主風」なのだ。それならこれと old monetary troubles (借金とふみたおし)との関係も見えてくる。しかしリッジは弁護する。

But, even granting that some of the stories of extravagance were true, he was to be pitied rather than condemned. (p. 52)

しかし、浪費の逸話のあるものが真実であったことをたとえ認めるにしても、彼はとがめられるよりむしろ同情されるべきだ

ったのだ。

贅沢は事実だが、それは同情されるべきだという。さつき「ワグネルの心事を気の毒だ」といったのと同じ論法だ。

He was not a man who cared for ordinary success; such little vanities as he possessed were *childlike* in their simplicity. What his whole soul craved for was appreciation; his only longing was to be understood. (p. 52)

彼は並の成功を求める男ではなかった。彼がもっていたような小さなものものの虚栄などそれらの純真さの点で小児に通うものだった。彼の魂全体が切望していたのは正しく認められることであつた。彼の唯一のあこがれは理解されることだったのだ。

ここまで来るとリッジのワグネル弁護の論理はくつきりする。ワグネルの全目的は自己の理想とする芸術を人類のために大成することである。この高貴な目的の達成を追求するワグネルの魂こそ至純、*so simple* というべきものである。浪費や贅沢などは、小児に通う、*childlike* 至純の魂の発露とみなすべきであつて非難されるべきものではない。こういう論理である。そしてこれはわれわれがすで見えた論理である。あの天才主義と結合した啄木流「小児の心」と酷似した論理なのである。

リッジの *Wagner* が啄木の中で占めていた位置と以上のような内容とを考えあわせるなら、かの過程を推進したモメントとしてこの英書を挙げてよいであらう。

二つ目の回路。リッジの示す以下のようなワグネルも啄木流「小児の心」形成にとって重要な要素であつたと思われる。

二二歳の時ワグネルはマグデブルク劇場で歌劇「恋愛禁制」を初演。惨憺たる失敗に終つた。その結果

This untoward incident left Wagner in sad straits; he was almost penniless, and in debt besides. (p. 13)

この不運な事件はワグネルを悲境におとした。彼はほとんど文なしだった。その上借金をしていた。

この借金をワグネルはどうしたか。返したなどとはどこにも出てこない。このマグデブルクを去つたワグネルはケーニヒスベルクでミンナ・ブラナーと結婚した。そして翌年リガの劇場の音楽監督になるのだが……

Always conscientious, he was oppressed by the sense of the debts he had contracted at Königsberg; and money was more needful than ever for another important reason. (p. 15)

いつも良心的なので、彼はケーニヒスベルク時代に作つた借金を考へて憂鬱になつていた。金は別の重要な理由からしてこれまでよりもいっそう必要だった。

「別の重要な理由」とはパリへ行つて自分の音楽上の理想をかなえたい、ということだった。啄木も東京へあるいはアメリカへ行つて自分の文学上の理想をかなえたい、そのための金がほしい、と思つている。ワグネルがいつも conscientious で借金の思いに苦しんだかどうかはともかく、借金を負つていた事実は啄木の印象に残つたはずである。

ワグネルはそしてパリへ。パリにおけるワグネルの窮境と苦闘に

対して啄木は満腔の同情と共感を示す。なぜか。第一次上京時の経験と重ねて読むとこの世で最も尊敬する人があまりにも身近だからである。リッジーをもとに啄木は例の七月二三日の日記のつづきにこう書いている。

タンホイゼル物語の初めてワグネルの味ふ所となりしは千八百四十一年の終りにして、彼が内外蹉跎困惑交々心を襲ふの際に於ける巴里客舎の燈下に繙かれたるなり。当時ワグネル二十九才。……才藻漸く渾円の域に進みながら、世は依然として彼を迫害し誹謗し、……崢嶸の路其極に達せるのみか……憂痛内外より併せ攻むるの状ありき。

このあたりはワグネル伝の中で鮮烈な印象を得たところらしく、翌年七月七日付岩手日報にもこう書く。「噫、貧困は実に天才を護育するの播籃なりき……我がリヒャード・ワグネルも亦……飄然として祖国を去つて巴里に入るや、淋しき冷たき陋巷の客舎にありて具さに衣食の爲めに労苦を嘗めぬ。」

バリでも貧乏だった。いったいこの後ワグネルはいかにして生計をたてていったのか。ドレスデンに帰り宮廷歌劇場指揮者になるが一八四九年五月のドレスデン蜂起に参加。亡命してチューリヒへ。このチューリヒ時代の十年間 the ten years spent in zurich ワグネルには金銭やその他の物質的援助者がたくさんあらわれる。

Generous friends came to his assistance at the outset, and through their aid he was placed in a position which enabled him to pursue his work freed from pecuniary responsibilities. (p. 38)

まず気前のよい友人たちが彼の援助にやって来た。そして彼等

の援助によってワグネルは金銭上の重荷から解放されて仕事に従事しうる位置におかれた。

ピアノ教師のヴィルヘルム・バウムガルトナー、政府高官ヤコブ・ズルツァーが最初に現われ、またイギリス人女性ローソ夫人（フランス人商人の妻）が有力な金銭上の協力をもたらした。そのあとユリーエ・リッター夫人が一八五一年から一八五六年まで彼のために年金を用意した。さらにそのあとヴェーゼンドンクという商人が別邸を提供し、その外にも少なからぬ援助をよせた。（三八頁）ワグネルの偉大な生涯、偉大な仕事は多くのよき理解者たちの金銭的、物質的援助を不可欠の条件としていたのだ。それにしても貧しいこの天才には何と多くの理解者たちが次々と現われてくるのだろう。たしかにこの時代以後のワグネルにはバリ時代のような貧窮は過去のものだ。

Besides these there was his greatest friend, Franz Liszt. The friendship of these two men was in every way remarkable. The one was rich, powerful, at the head of musical Europe; the other poor, unrecognized, comparatively unknown. But Liszt had perceived Wagner's genius, and it became one of the chief aims of his existence to assist and befriending him in every possible way. (p. 38)

これらの人々の外にワグネル最大の友フランツ・リストがいた。この二人の男の友情はあらゆる点で注目すべきものだった。リストは金持で力がある、ヨーロッパ音楽界の頂点に立っていた。片やワグネルは貧乏で、認められておらず、比較的無名だった。しかしリストはワグネルの天才を認めていた。そして

てできるかぎりのやり方で彼を金銭的に援助すること、また味方になってやるのが彼の人生の主要目標の一つとなった。

理解者、金銭上の援助者、協力者を兼ねた、自身が天才でもあるすばらしい友人リスト。友情に厚く同時に友に友情を求めることも強く、天才意識が鮮かで同時にそれを認めることを友人・知己に内心で強く求めている啄木、その上今では老若を問わず、自分を認め理解してくれた上で経済的に援助してくれる人が一人でも欲しかった啄木は、ワグネルのバトロンたちやリストのような強力な友を求める気持、さらにそれを創り出そうとする気持を改めて強くかきたてられたにちがいない。

さて、一八六四年には大バトロン、ルートヴィヒ二世が登場する。

.....to Wagner he (=King Ludwig II) came as a friend sent from Heaven. (p. 54)

.....ワグネルのところに彼（ルートヴィヒ二世）が天からつかわされた友としてやって来た。

このあたりでもリッジーの曲筆はひどくルートヴィヒ二世のバトロンぶりは過小に描かれている。それでも当時の啄木にとっては夢のような話が次々と述べられている。過小とはいっても、バイロイト祝祭劇場の建設費をはじめとする莫大な費用の財源になる後援会証券がなかなかさばけなかった時の、ルートヴィヒ二世の巨大なバトロンぶりについては次のように記す。

King Ludwig again came to his assistance. And now the king gave practical evidence of his sympathy with the project by advancing the required funds out of his private

purse on the security of the unissued Patronatscheine.

(p. 65)

ルートヴィヒ王がふたたび彼の援助にあらわれた……そして今や王は、未発行の後援会証券の安全性を保障するために彼の私的財源から必要な基金を前払いするということで、ワグネルの大事業への共鳴の実質的な証拠とした。

もうこのくらいでよいであらう。

この二つ目の回路を通じて、ワグネルが借金をして貧しい時代を切りぬけたらしいこと、またその天才実現のためにすばらしい理解者たち、バトロンたち（そして大バトロン）があったことを啄木は知っていた（あるいは読み直して確認した）。この知識も「小児の心」の論理に合流する。したがって啄木にあって、例の「四つの罪」はすべて「小児の心」の発現として正当化されることになる。

以上のようにして樗牛の「小児の心」は啄木流「小児の心」へと飛躍したのである。

最後に啄木の資質と「小児の心」との関連について一言しておきたい。金田一京助が早くから指摘しているように啄木は「子供のような柔婉な感性の持ち主」で、ほれこむと対象を徹底的に模倣した⁽¹⁶⁾。金田一の証言は他の人々の証言や啄木の作品によっていくらかでも裏づけうる。この啄木にとってワグネルは生きた一元二面観哲学なのであり、その人生ははかり知れぬ尊敬の対象なのであった。「小児の心」の論理によってワグネルの人生を模倣するための通路を発見した啄木は、以後長年にわたって啄木独特の徹底性をもって、ワグネルの人生を模倣する。その手はじめが、第二次上京であ

った。
冒頭の奇行を思い出していただきたい。

結 語

啄木を「生活能力の欠如した男」「借金魔」「金にだらしない男」「落伍者」等と見なす人々は啄木をその浪漫主義時代の生活現象においてとらえているのであって、その人々の見解は皮相のそしりをまぬかれない。彼は実際に多額の借金をし、それを返済できなかった。その金銭感覚は当時の並の感覚からするとたしかに贅沢であった。パトロン捜しも凡人にはできぬやり方で行なった。そうした言動には常人の理解を越えるがゆえにうそに聞こえるほんとうとほんとうの嘘とがあった。しかも啄木の「借金」の論理は実際に啄木のある弱さと結びついているのであるし、借金生活を永くつづけ、その間に天才主義(そして「小児の心」の論理)がしだいに崩れてゆくに つれて借金もふみたおしもただの借金やふみたおしに堕していった、という側面もある。これがまたいつそう人々の啄木理解を皮相の見にとどめてしまう。しかしたとえば金田一京助はすでに次のように述べている。「大体啄木は対文学、対人生みな一貫する一つの根本原理で生きていきたいとしてその原理を見出そうと苦悶し」た人であったと。またいう。「啄木の場合は、いわゆる言行一致ではなくてそれよりもっと根本にさかのぼって、自分の思うことと行うことを一致させる、言いかえると自分が思った通りに行動して、心と行いとの間に寸分の隙間もない、そういう真実の生活(17)を望んだから、嘘つき、はら吹きと言われても案外平気であり得た」と。本稿の考察は結果的に、まさにこの見地に一致して行った。

しまね・きよしは「自我への凝結と状況への飛翔——思想家としての石川啄木」という卓論の中で次のように述べた。「啄木の全体像を構成するためには」歌人、詩人、小説家、評論家、代用教員、地方紙記者等としての各「部分像を組みあわせる結び目に、思想家としての啄木像を挿入しなければならない」と。わたくしはこの卓見にさらにつけ加えておきたい。啄木のある劇的な、多彩な生活現象を理解するためにも——金田一が教えてくれているように——思想家としての啄木を核心に据えねばならないと。このような研究の行く手にこそ、統一的啄木像が姿を現わしてくるであろう。

注

- (1) 細越夏村「追憶の断片」『啄木研究』一九二六年四月。『国文学』一九七五年一〇月に転載。
- (2) 『石川啄木全集』(筑摩書房) 第四卷一四九頁。以下『全集』④——四四の如く略記。
- (3) 伊東圭一郎『新編 人間啄木』(岩手日報社 一九七四年一月) 八——八二頁。
- (3') 前掲書九九頁。
- (4) 資料的根拠は次の通り。入京時の約三元は『全集』⑦一九九、山本千三郎よりの為替は田村宗一・田中礼「啄木に関する未発表・新資料について——絵葉書、証文、手紙——」『新日本歌人』一九八六年一〇月、金田一の分は『全集』⑦一八二—一八三外、佐土原町の下宿と大和館の分は「借金メモ」⑧「全集」⑧一四一—一四三、田沼の分は「借金メモ」と前掲「新編 人間啄木」八三頁、波岡の分は「借金メモ」と『全集』⑦一九九。なお山本からの為替六〇円の内訳及び使途については謎が多い。またわたくしは尾崎行雄から数十円の援助を受けていると推定している。その外にも啄木は借金ではなく無心をしているはずであるが

それは「借金メモ」に記入されていないので裏付けは得られない。さらに『全集』⑥―三三四によると、上京直前に岩手日報の清岡主幹より五円の餞別をもらっているが着京時には全額費消してたとみられる。そして帰郷の際の約半月間にも土井晩草から一〇円借り、大泉旅館の七円をふみたおし（借金メモ）、友人たちからももらった一〇円（前掲『新編 人間啄木』八九頁）をつかっている。汽車賃等約五円をのぞいて、今わかるだけで二二円を半月でつかっているわけである。こうした金の遣いぶりもあわせ考えるなら費消総額は一七九円よりはるかに多かつたと推定される。

- (5) 週刊朝日編『値段の明治・大正・昭和風俗史』（一九八一年一月）二〇五頁。

- (6) 週刊朝日編『続値段の明治・大正・昭和風俗史』（一九八一年一月）一九頁。

- (7) 岩城之徳『補説石川啄木伝』（さるびあ出版 一九六八年四月）五九―六〇頁。

- (8) 『全集』⑦―一〇八―一一〇。

- (9) 三浦光子『兄啄木の思い出』（理論社 一九六四年一〇月）七〇、七二頁によると、同じくユニオン会の阿部修一郎に陸詰めで責められ、絶交を申し渡されたが、啄木は黙りこくったままだったという。

- (10) 近藤典彦『ワグネルの思想』をめぐる断想（『啄木文庫』関西啄木懇話会 第一八号 一九九〇年一月）一六頁。

- (11) 『明治文学全集』（筑摩書房）第四〇巻 一一六頁。

- (12) 近藤典彦『石川啄木のワグナー研究と英書』（『文叢』成城学園高校 第二四号 一九九〇年三月）

- (13) 近藤典彦『国家を撃つ者 石川啄木』（同時代社 一九八九年五月）によって、「天才」意識については四三―四七頁、天才主義については一〇八―一二〇頁、一元二面観哲学については二五―三〇頁、三層構造については二―三頁を参照されたい。

- (14) このくだりを見ていると啄木の一元二面観哲学はワグネルによってすでに完成されているように思える。しかし啄木にいわせるとそうでは

ない。ワグネルがトルストイとニイチエの欠陥を事実上克服した「意志拡張の愛」の観念はあくまでも彼の芸術作品の中に展開されているものであって、ワグネルがシェンハウエルの「絶対意志」と、愛との関係を考究して創り出した哲学ではないのである。「しかし」芸術家としてのワグネルは、意志愛一体の境地に神人融合の理想を標示しただけで、既にその天才の使命を完全に遂げた」と言つてよいのである。（『渡民日記』一九〇六年三月二〇日）そしてこの意志の世界と愛との関係を哲学的に解決したものがそ自分の一元二面観哲学に外ならぬ。こういうことなのである。

- (15) この七月二三日のうちに「小児の心」をワグネルの伝記に確認べく Wagner をひもといっていた可能性がある。

七月二三日の「小児の心」に関する箇所は朝七時にはじまる記述の後半部分である。そしてあそこで一たん筆が擱かれる。正午に近いと思われる午前ふたたび筆が執られ次のくだりがはじまる。「日は午に上りて暑さ加はり遠く夏蟬の声きこゆ。我は喜びを以てワグネルの事書かんとす。」どうして突然「ワグネルの事」を書くと言いだしたのか。これまで二日間分とこの「午前七時」の分とで約五六〇〇字も書きつづってきたのに「ワグネルの事」を特に書くこととする態度は見られない。ここに突然「ワグネルの事」が出てきたのである。それも「喜びを以て」書くことなのである。節子が先日ワグネル関係の楽譜を送ってくれたらしいから、その人に「ワグネルの事」を書くのがうれしい、ということがあるかもしれない。しかし日記を読みつづけてここに至ったときに受ける印象からすれば、啄木自身に何かうれしいことがあり、それで「喜びを以て」といつているかのようなのである。もしこの印象が正しければ、それは啄木が昨夜「小児の心」の論理を発見して半年來の悩みがふきされた「喜び」であり、しかもワグネルのその喜びと何らかの関連を有することを示すことになる。この時の記述の中には「僕やワグネル研究に多大の趣味を有するもの」とあり、また「妻よわれは限りなき満足を以て、今『タンホイゼ』に就て君の参考となるべき事を書き送らん」とある。そして二四日、二六日、二七日とリッジーの Wagner を

丹念によみかえしては『タンホイゼル』について書きついでいる。そして二八日朝「左に記す所は乃ちリッヂー氏がワグネル劇解説中の『タンホイゼル』の一章を抄訳するものなり。」で中断したまゝとなる。こうして毎日 *Wagner* を丹念によみかえしていったことと七月二三日の

「小児の心」とを関連づけて考えることは可能なのである。

- (16) 金田一京助『新訂版、石川啄木』(角川文庫 一九八九年六月) 二二頁。

- (17) 前掲伊東圭一郎『新編 人間啄木』二三九～二四〇頁。さらに前掲金田一京助『新訂版 石川啄木』二二九頁。

- (18) 『ビエロタ』'91秋 季刊12。

付記 リッヂーの英文に関連した箇所については、成城学園高校における同僚直原典子氏のご校閲を仰ぐことができました。記して謝意を表します。